

ヨーロッパ市民の誕生* 開かれたシティズンシップへ



合田 素行

15年以上も前になるだろうか、都内某所でフランスアルザス地方の都市ストラスプールの大学の教授夫妻と、数人の外国通の友人を交えて食事をしたことがある。友人たちが得意のフランス語、ドイツ語、英語で話しかけると、夫妻が話かけられた言語で直ちに対応する。私の方は、話の内容もわからず、ただ呆然と聞いていたわけだが、これは「ヨーロッパ体験」だと思ったことがあった。

「ヨーロッパ市民」が遠からず生まれるのでは、とその時は思った。本書は、まさに「ヨーロッパ市民の誕生」と題され、それでつい手にとったのだが、タイトルは販売戦略上の命名なのだろう、一読、やはりヨーロッパも一筋縄ではいかないか、と言うのが正直な感想である。

戦後、ヨーロッパは新大陸への移民を生み出す場所から、多くの移民を受け入れる「移民大陸」になってきた。そして「移民」が時に社会問題になることが報じられ、徐々により一般的な社会問題、イギリスやドイツでは労働機会の争奪を通して、フランスではとくにイスラム系移民の教育問題、そしてオーストリアでは極右政党の台頭などが耳に入ってくるようになった。EUの経済的政治的統合は制度的にはかなり進められている一方、移民を巡る事件が頻発するヨーロッパは一体どういう方向に進むのだろうか。

本書を読むと、居住外国人の問題や対応がその国の歴史や条件によって、実に様々な形をとっていることがよくわかる。たとえば冷戦体制の崩壊・ドイツ統一後にドイツ自治体では住民千人当たり難民9.5人の受け入れを強制されるという驚くべき人口の移動・混交

の実態、各国は、迷いながら時に進歩的、時に保守的な政策を模索して対応してきた。

本書は外国人居住が生み出す問題を多面的にかつ自らの経験をベースに書いている。まず従来からあるモザイク・ヨーロッパ（イギリスのスコットランド、ウェールズ、フランスのブルターニュ、スペインのバスクやカタルーニャ）の問題がある（第1章「再生するネーション」第2章「言語、アイデンティティ、シティズンシップ - カタルーニャの世界」）さらに非ヨーロッパ系住民の問題（第3章「新しい移民大陸ヨーロッパ」）移民の持つ諸権利のあり方の模索（第4～6章で様々なシティズンシップの態様が示されている）そして新書版の本書では話題を広げすぎるとも思われた、ジェンダーや少数派の権利要求の問題（第7章「家族、ジェンダー平等 - 少数派からのシティズンシップ要求」と記述を移し、世界的な経済の停滞などを背景とするのであろう、「多元文化主義への逆風」の動向（第8章「逆風とチャレンジ」）が最終章である。最終章では、90年代にはいってヨーロッパ系住民自体の居住や彼らの権利についての問題は急速に無くなりつつあると書かれていたが、そちらはそうなのだろう。

本書で印象的だった話題を2つ。外国人の権利獲得とそれへの対応の紆余曲折の中に、実定法とは別の「自然法」の伝統をヨーロッパの人々に見ることができると指摘されていること、そして外国人の生活に密着した自治体政治の中で、選挙権はないけれども政治的決定に関与させる試みがかなりの地域で見られること（川崎市でも同種の試みがあるという）、これらは非常に関心をそそられる指摘であるだろう。

我が国でも、水商売女性の入国問題、外国人花嫁の隆盛から、最近では貿易の自由化などで、外国人の居住や職業上の資格が議論されるようになった。また在日の人々の問題も忘れてはならない。それにしても農業労働力への参入はどうなるのだろうか、と連想はあらぬ（？）方向に飛ぶ。

* 宮島喬、『ヨーロッパ市民の誕生 開かれたシティズンシップへ』、岩波新書、(2004)。